

# 21世紀に求められる ピアノレッスン創造 (1) . . . . . 5

～学校教育と社会教育の接点からアプローチ～  
岡本薫、山下博史、清水久嗣、ダグラス・デムスター他

# 多角的な導入指導を求めて . . . . . 20

ピティナ・ピアノ指導セミナーvol.7  
北村智恵 酒井直隆 江崎光世 成田剛

特別企画 ショパン没後150周年記念

# バラード全4曲公開レッスン . . . . . 48

講師：エフゲニー・ザラフィアンツ

# OUR MUSIC

## CONTENTS 213

国際舞台で活躍するピティナ指導者たち . . . . . 36
第48回ミュンヘン国際コンクール 播本三恵子
ピティナ会友インタビュー . . . . . 40
私の歩んできた道 レギナ・スメンジャンカ
コンチェルトの魅力 . . . . . 32
海外耳より情報 フランス編 . . . . . 42
ジャック・ルヴィエ ピエール・レアック 他
音楽大学トップインタビュー . . . . . 46
桐朋学園大学 江藤俊哉
はじめての指導者賞 . . . . . 52
わたしのインターネット活用法 . . . . . 54
メールディスカッション 池川礼子 山脇一宏
ピティナっこりポート 西川潤子 成川昌子 . 56
支部をたずねて 福岡支部 . . . . . 60
ポピュラー活用講座 佐上原知子 . . . . . 66
作曲家研究 久元祐子 . . . . . 72
巻頭随筆 福田成康 「“好き” のもたらすもの」 3
和音調子のひとりごと 「ブラボー」 . . . . . 96

PTNA CONCERT TICKET . . . . . 62
CONCERT REPORT . . . . . 65
上田弘子 田中麗子
北から南から . . . . . 85
PTNA NEWS . . . . . 86
入賞者ビデオ . . . . . 表2
ピティナ・ピアノステップ . . . . . 73
ジーナ・バックアウワー国際コンク
ールオーディション . . . . . 74
ABRSM . . . . . 74
十代の演奏家シリーズvol11
根津恵理子 . . . . . 74
英国王立検定 . . . . . 75
日本フィルハーモニー交響楽団
サンデーコンサート 関春絵 . 84

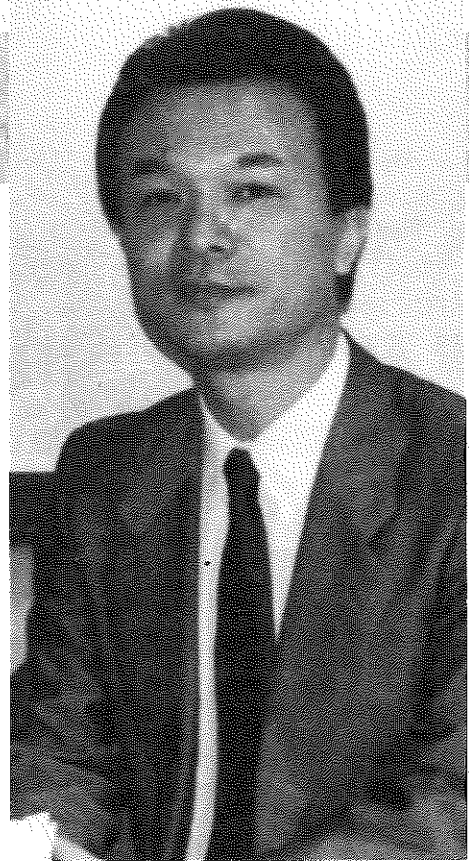
# 21世紀に求められる ピアノレッスン創造【1】

～学校教育と社会教育の接点からアプローチ～

21世紀まで、あと1年余り。21世紀に求められるピアノレッスンを、私たち自らの手で創造していこう、という気持ちを胸に、様々な分野からその指針を見出そうと、このたびシリーズ特集を企画してみました。1回目の今回は、学校教育の周辺を軸に、街のピアノ教室などの社会教育との接点からピアノ教育をアプローチします。生涯学習社会が到来し、さらに個々人の生き方や価値観の多様化が進む中、生涯学習の出発点である「学校」自体がどう変わっていくかが問われています。当協会の先生方は、学校関係の指導者も多数いらっしゃいますが、学校外での指導者もまた、同じ学齢期の生徒を育てている立場において、その問題は重要です。小学校から大学（音楽系）までの学校教育は、現在どのような問題点を抱え、どのような方向を模索しているのか。または、現在においてどのような成果を上げているのか。ピアノ教育との関わりの中から学校教育周辺の動向を探り、ピアノ教育にも得られるべき点、連携の中から補完しあえる点を考えていきましょう。

\*\*\*\*\*

# 「学校教育と社会教育の動向」



**岡本 薫氏**

文部省 生涯学習局 学習情報課課長

おかもとかおる◎1979年東京大学理学部卒業後、文化庁（長官官房）、OECD（経済協力開発機構）科学技術製作課 研究員文部省（体育局、大臣官房）、OECD教育研究革新センター（CERI）研究員、文部省（国際企画課課長補佐、生涯学習企画官等）、文化庁（国際著作権室長）を務めた後、現在に至る。著書に「国際化と学習の課題」「入門・生涯学習政策」などがある。

実は、生涯学習社会と言われたのは、学歴社会を打破しようという意識があったからです。

学歴社会というのは、江戸時代の士農工商の階級制度を打破するために、明治以降、意図的に作られたものなのです。「高校卒業、大学卒業、という経歴で能力が評価される。どの階級の出身かは関係ない。」と言うために。

それが今、あまりにも学歴だけに頼りすぎている。もっと大きな問題は、学歴が能力を正しく表示していない。また、やり直しが利かない。それが問題となって、生涯学習社会ということが言われたのだ

です。つまり学校教育はやりすぎではないかというところから出発したため、生涯学習を振興するための政策は、学校外のほうが主になっていたのです。

過去十年間のことを考えると、人が生まれてから死ぬまで、いつでもどこでも誰でも学習できる機会を提供しようと言われて、学べなかったところを学べるように穴埋めしていくということについては、成功してきたのではないかと思います。子供の学校外活動、女性の学習機会、高齢者の学習機会。まだ穴が残っているのは社会人男性でしょうか。

今までの生涯学習政策があまり成功してきていないのは、従来からあった学校教育の問題に対応するという事です。いじめや校内暴力、学級崩壊という問題もあり、大学の問題もある。生涯学習政策の今後の課題は、生涯学習の一部であるところの学校教育の部分ではないかと思われます。

## 生涯学習全体の動向

### (1) 雇用・キャリアアップのための学習活動

日本の経済の調子がよかった数年前は、「心の豊かさ」や「生きがい」などが強調されていたが最近の不景気の影響から、職業生活に役に立つ学習活動への関心が高まっている。

### (2) 子供の問題への関心の高まり

子供に関する問題の深刻化により、「全国子どもプラン」や「子ども放送局」（p9表参照）等の政策を展開

### (3) 情報化の進展

情報化により情報流通ルートが変わり、新聞社や放送局などだけでなく、大学（海外の大学が通信衛星で入ってくる）や図書館など教育機関についても独占が崩れつつある。

### (4) 自己責任が基盤

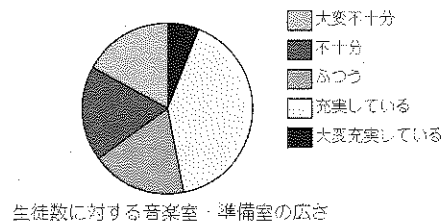
政治的な意思決定プロセスが変化。「役人が答えを出して他の人を全部説得してしまう」時代が終わりつつあり、「国民と政治家が決める。」時代になってきている。役人は分析して情報を提供し、オプションを示すだけ。生涯学習は、学習者にとっても学習機会提供者にとっても、自己選択と自己責任が基本であり、他の行政分野がこれに追いついてきた。

## <1> 学校教育の位置付け

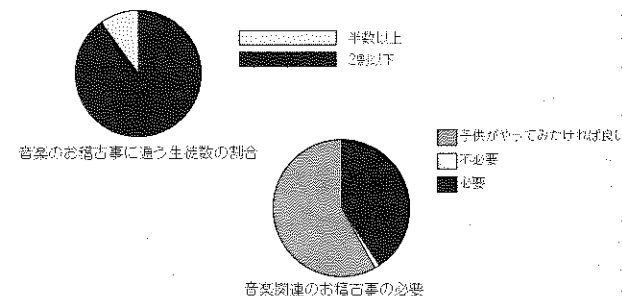
生涯学習という概念の中には、学校教育における学習と学校外における学習が含まれ、学生時代も含めて生まれてから死ぬまでの学習の全体が含まれます。

## 【音楽教育の現状】

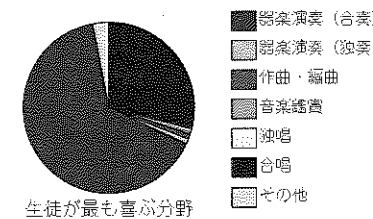
1. 学校での音楽室・準備室の広さは、生徒数に対して十分なものです。また、楽器や、音楽教育ソフトの数は充分ですか。



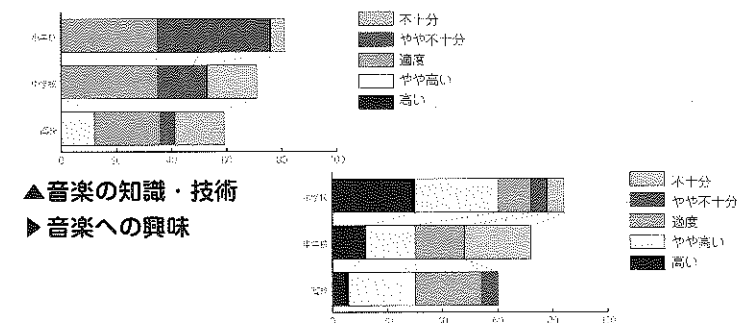
2. 音楽のお稽古事に通っている生徒は、生徒全体数のどのくらいですか。また、音楽関連のお稽古事は必要だと思いますか。



3. 指導する中で、最も生徒の喜ぶ分野は何ですか。



4. 小学校低学年、中学年、高学年、また中学生や高校生の各学年において、音楽の知識・技術の修得度および興味のレベルはどの程度とお感じですか。



<2>子どもが得る情報量の増大と学校教育と社会教育の役割

今まで膨らみすぎていた学校教育の機能を減らし、学校が負いきでいたものを、家庭や地域など、学校外の子供達の活動の場で担おうという流れで、平成14年度から改訂される学習指導要領では、教育内容を3割減らすことになります。学校ですべきことは何か、ということが現在の課題です。

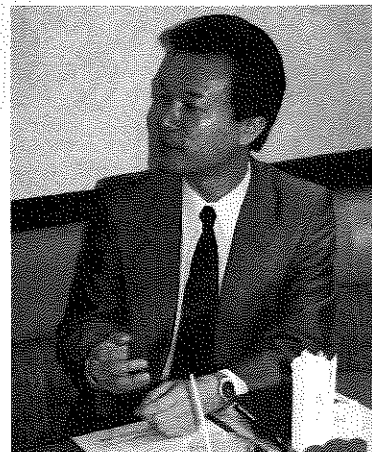
音楽についていうと、明治の初めに学校を作った当時のように、子供達は学校以外に西洋音楽に触れる場がないという前提で考えると、「子供たちが触れるべき音楽を過不足なく学校で教える」という方針になるでしょう。ところが今は情報化によって、学校という音楽提供機関の独占が崩れ、レコードの発売、ラジオやテレビの普及、ディスコやカラオケの誕生、インターネットによる音楽配信・・・と、世の中に音楽がはびこっている。

そうすると、「学校の音楽教育とは何だ」さらには「学校の音楽教育は何のためにやっているのか」という事が問われる時期になっている。更に「学校教育の音楽と学校教育外でやる音楽とど

ういう役割分担になるのか」といったことは、テーマとして非常に興味深いものがあります。これからは、その答えを、世の中の音楽関係者みんなで考えなければならぬことだと思います。

まず、学校での学習活動についてですが、平成8年7月の中央教育審議会で、これからの学校教育のあり方が提言されています。昨年告示された新学習指導要領は、この提言に基いているわけですが、要は、平成14年から実施される完全学校週5日制のもとで、各学校が「ゆとり」の中で特徴ある教育を展開し、子どもたち1人1人の「生きる力」、特に「自ら学び自ら考える力」を培っていくことを基本的なねらいとしています。

ものを子どもに「教え込む」のではなく、子どもの中から引き出し、育てていくことにおいては、音楽は「生きる力」を育む重要な役割を担っているといえるかもしれません。表現や鑑賞を通じ、音楽の美しさを感じる感性を育み、創造的な学習活動を通じ、柔軟かつ繊細な思考を育むことができれば、音楽を通じて豊かな気持ちで生きていく根源的な力、つまり「生きる力」になると考えられるわけです。



<3>マーケットメカニズムが基本となる学習機会提供

学校外での音楽の学習活動についていうと、人々が求める（需要がある）学習機会を提供する（供給する）人が、市場で勝利する、というマーケットメカニズム以外にはありえません。したがって、学校外での音楽教育の指導者に必要なものは、マーケットで勝利できる能力です。

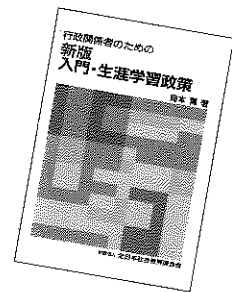
例えば、小学校の教員は、子供全員の教育を任せるわけですから、それなりの条件を備えた人でないと、子供が選択できない分、弊害を与えかねないでしょう。また、スポーツなら、指導者如何によって、とりかえしのつかない怪

我を負ったりする可能性が大きい。しかし、音楽では、今までダメな指導者だったために取り返しのつかないダメージが与えられたということはなかった。

だから、ピアノ教育という社会教育においては、完全にマーケットメカニズムに任せる世界だと考えます。人々の求めているものは何か、マーケットを広げるだけ考えるのであれば、色々なアイ

デアが出てくるでしょう。

当然ながら、ある形にこだわればこだわらざるほど、マーケットは小さくなります。ある人が考える「あるべき姿」にこだわればこだわらざるほど、世界は狭くなっていくということ。だがあるべき姿にこだわらないと、オリジナルの芸術的な形は失われていく。それをどうするかは、みなさんの自己責任の中で選択していくのです。

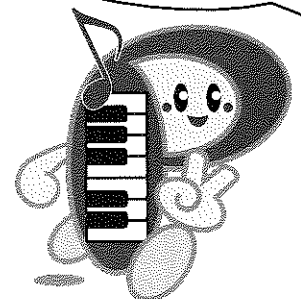


上写真：岡本氏の著書「行政関係者のための 新版 入門・生涯学習政策」財団法人日本社会教育連合会より発行されている。

「子ども放送局」に出演しよう！

情報化の一つとしていろんな情報チャンネルができる中で、文部省自身も放送局になっている。文部省がエルネットという通信衛星を使ったシステムを持ち、放送やイントラネット、メール一斉送信などの機能を用い、学校の先生の研修とか、文部省の会議を直に流すなど様々な用途に使用されている。その中で、学校が休みの土曜日にの子供達が活動する場としてやっているのが、子ども放送局。先日7月末に開局した。子ども達に夢と希望を与える番組を提供するとうたい、「放送局」という名前がついているが、どちらかといえば見る番組というよりは参加する番組。双方向で送信ができるのが特徴。

ピティナっこたちに、子ども放送局に出演してもらったら、どんな番組が可能かな？先生方のアイデアを返信アンケートに書いて送ってね。



9月～12月の放送スケジュール

テーマ	9月		10月		11月		12月	
	9月11日	9月25日	10月9日	10月23日	11月13日	11月27日	12月11日	12月25日
1100	本の世界 ・司書がスポーツに関する図書を紹介する	本の世界 ・司書が料理に関する図書を紹介する	まなびの広場 99 からこんにちは ・まなびの広場の様子を紹介する	本の世界 ・司書がものづくりに関する図書を紹介する	本の世界 ・司書がお金や株に関する図書を紹介する	本の世界 ・司書が音楽に関する図書を紹介する	本の世界 ・司書がロボットに関する図書を紹介する	子どもPD(特番) ・第1回子ども編集委員会における子ども週刊の企画を基に制作した番組を放送する
1115	金メダルへの道 -JOC- ・オリンピックの金メダリストが金メダルまでの奮闘を語り、子ども達からの質問に答える ・スポーツ科学についての最新の研究成果を踏まえたトレーニング法などを紹介してもらう	料理の世界 -読書読書学校- ・TV番組「料理の鉄人」でおなじみの料理師が料理や料理人の世界について語り、子ども達からの質問に答える ・包丁の使い方や料理の基礎基本について解説してもらう	ゲストが語る -衣笠祥雄 森下洋子 まなびの広場は楽しいぞ ・人気プログラムを子どもレポーターが紹介する	親人の世界 -瀬田の町工場- ・瀬田の町工場を訪れ、産業を支える町工場の技術者の誇りと技術を語ってもらう	秋のしくみ -大蔵大臣が秋のしくみについて分かりやすく話すとともに子ども達の質問に答える ・また、いくつかの課題を語る	この秋交響楽団 -読書読書学校- ・読書読書学校の団員が、音楽を好きになる喜びを話すとともに子ども達の質問に答える ・また、劇中の演劇の音色や特徴などを説明し、演劇のコツを語る	ロボットの秘密 -SONY- ・森田氏が最新の科学技術を駆使した話題の動物型ロボットの秘密を子ども達に解説するとともに子ども達の質問に答える ・自作型ロボットAIBOなどを実際に見せてもらう	
1330	生+TV電話+V 地方からのたより ・テーマに関連した活動や人物などを発信し紹介する	生+TV電話+V 地方からのたより ・体験を通して親子の絆を深めたい読者体験の場として、読者からの質問に答える(特番)	元気いっぱい・広島っ子 ・広島県の様子や元気な広島の子どもを紹介する	生+TV電話+V 地方からのたより ・百里の郷土の人達と空宮初子さんにものづくりにかける情熱と楽しさを語ってもらう(特番)	生+TV電話+V 地方からのたより ・読書読書学校、読書が大好きな子ども達と読書について話してもらう(特番)	生+TV電話+V 地方からのたより ・読書読書学校、読書が大好きな子ども達と読書について話してもらう(特番)	生+TV電話+V 地方からのたより ・各地、各所のロボットコンテストの様子を紹介する	生+TV電話+V 地方からのたより ・各地、各所のロボットコンテストの様子を紹介する
1400	スポーツ教室 -NYC- ・オリンピック選手が子ども達を指導する	子ども料理教室 -読書読書学校- ・小学生の料理コンクールに参加した子ども達に、レシピと調理のコツを教える	チャレンジに挑戦 ・全国の子ども放送局を見ている全員でチャレンジランキングに挑戦する。成績はFAXなどで、会場に送付し、集計する	ものづくり教室 -NYC又は特番- ・簡単な材料でできるものづくり教室を行う	おはようの使われ方 -入場券- ・子ども達と大蔵省職員とが対談を行う	子ども音楽コンクール ・子どもの音楽コンクールに出演する子ども達の様子をレポートするとともにコンクールの模様を放送する	ロボットの秘密 -NYC又は特番- ・キットによるロボットの制作体験を行う	
1600	生+TV電話+V	生+TV電話+V	<広島からの特番>	生+TV電話+V	生+TV電話+V	V	生+TV電話+V	生+TV電話+V

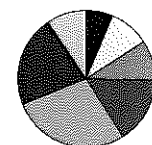
※番組内容については現時点において計画している案であり、具体的には、今後、その内容をつめていく。

5. 総合的な学習の時間が増えてきますが、音楽の分野ではどのような授業を実施することが望ましいと思いますか。

(意見の一部抜粋)

- ただでさえ授業数が少ないのに、純粋に音楽の勉強をする時間が減るので総合学習に組み入れたくない。他の授業内で音楽を取り入れて欲しい。
- 美術や技術とタイアップして、民族楽器を手作りして演奏する。国語とタイアップして、自作の詩に曲をつけて学級歌を作る。社会科とタイアップして、世界の民族音楽調べと地図作りをする。特活、道徳などの要素を持つ活動としては、老人ホームなどの慰問の際に合唱や器楽の演奏をする。
- 国際理解とのタイアップ、情報教育の一環としてコンピュータの基礎指導と合わせて、福祉と関連させて。

6. 音楽系の検定でご興味のある分野を下記よりお選び下さい。



- その他
- 検定に限らず委員会形式の授業の場
- 作曲・編曲系
- 楽器を特定しない演奏
- 鍵盤楽器系の演奏
- 楽理系(音取り・音楽史・鑑賞)

アンケート協力：現代教育新聞社  
小・中・高校の音楽の先生を対象にアンケートを実施。89名の方からご返答をいただきました。

\*\*\*\*\*

## 「学校放送番組」から見た 21世紀の音楽教育

山上 博史氏

NHK 番組制作局 学校放送番組部チーフ・プロデューサー

やまがみひろふみ©1976年入局。長崎放送局勤務を経て、S57年から音楽番組部「音楽の広場」「ザッツ・ミュージック」「音楽夢コレクション」などのスタジオ音楽番組の演出にあたる。広島放送局制作に異動後、「にんげんマップ」などを担当。H8年音楽番組部に戻り、室内楽番組、N響番組などのプロデューサーを務めた。H11年6月から、学校放送番組部（小学校教科班）のチーフ・プロデューサー。



学校教育の主要な放送番組である「NHK教育テレビ」は、今年（1999年）で、放送開始40周年を迎えた。中でも、「学校放送番組」（小学校などで集団視聴した記憶をお持ちの先生方も多数いらっしゃるでしょう。）は、1969年にはNHK教育テレビの1週間の放送の半分を占めていたほど、「学校教育波」としての性格を確固としてきた番組である。

### 学校指導要領に則した 番組作り

山上さんが、この「学校放送」のチーフ・プロデューサーを担当したのは、5ヶ月前。今まで、「音楽の広場」や「N響アワー」など、クラシック音楽番組を軸に制作にあたってきた中で、この「学校放送」は、異色だったという。「たった15分の番組を、細かく切り刻んで収録することに、最初はびっくりしましたね。クラシック音楽番組は、演奏が終了するまでカットはしませんからね。学校放送は、特に子供が出演する番組。子供はそう長時間のことが覚えて

いられないですから、リハーサルは積んでいるがカットどりをするのは当たり前なんです」

人形劇的なミニドラマという、教育テレビの伝統的な制作手法を交えながら、新しい表現アイデアを捻出していく。

音楽科目の番組は、音楽専科の教師の少ない小学校4年生以下を対象に、『まちかどドレミ』（1、2年生）、『トゥトゥアンサンブル』（3、4年生）が現在オンエアされている。

制作のプロセスはまず、ディレクターが番組の狙い、キャラクターなどの企画案を作り、音楽専科の教員や文部省の方で構成されている諮問機関（テキスト委員会）に意見を伺う。構成作家を軸にディレクターが調整しながら番組のシナリオを作る。プロデューサーである山上さんは、出演者、制作予算、手間、表現方法などを調整を行い、番組全体の方針を立てる。

学校放送番組は、放送法により、基本的には文部省の定める学習指導要領に則って制作されているものの、「学習指導要領のどの項目

を取り上げるかは、こちらの方針。現場の子供たちが喜ぶことを取り入れて番組を作っています」という山上さんに、現在の番組作りのポイントをうかがった。

### 音楽の統合的な特性が、 番組作りに反映

「小学校低学年は、リズム感の育成に重点が置かれていると思いますが、『まちかどドレミ』でもやはり、リズム遊びを通して、進んで音楽をやろうという気持ちになってもらうように考えています。体を動かして楽しく音楽と遊ぶ、リトミック的な要素を取り入れています。」

「踊りが音楽からだんだんと体育の領域に入ってしまうのは、個人的にさびしい」と山上さん。「街角キッズ」という合唱団の子供たちが、ミュージカルのごとく大勢で歌いながら身体いっぱい踊っている。音楽の授業で、一緒に跳んだりねたりという場面を想定されているのかもしれない。聴覚や視覚のみならず、体全体で感じ取り表現する諸感覚に開かれる可能性や、言語、ドラマ、絵画、

ダンスなど、多岐にわたって他分野と関連し合う音楽の統合的な特性が、番組作りにも反映されている。

### 一つの楽器を通じ、 全楽器に共通する要素を指導

「3、4年生では、旋律に重点が置かれます。扱う楽器には、鍵盤ハーモニカやリコーダーが主に使われていましたが、2002年からの新学習指導要領では、旋律楽器、打楽器という指定しかないため、リコーダーに限定されない可能性があります。これは今後の番組作りにも反映されるかもしれませんが、とりあえず現段階ではリコーダーを大切にしていきたいと思っています」

実在の3、4年生が起用され、笛の先生というキャラクターのもと、毎回毎回上達していく（演技ではない）過程を番組の中で見せて共感を得るよう企画されている。また、手袋をはめた手だけの出演者もあり、笛を持つ指をアップにして、指先の動きだけを注目してみさせているシーンもある。

「どちらかという、指の作業の方に重心がいつているのではという懸念があります。歌に近い呼吸の影響が大きい楽器というのも、リコーダーを取り上げる狙いかと思うのですが、それにしても息の使い方の研修が足りないかな、と。鍵盤楽器だろうと歌だろうと全ての楽器に共通する要素を、リコーダーを通して伝えたい。抽象的な考え方なので今表現方法を考えているところなのです。」

運指方法の伝授に終始しがちなピアノ指導にも共通する悩みといえるかもしれない。

### バーチャルと実践の 組み合わせ

小学校低学年といえば、僅か15分のレッスンでもじっとしてい

はくれないもの。学校放送の15分番組でも、山あり谷ありで、子供たちに飽きさせないヒントになるものが随所に見受けられる。

「テレビ番組とは、バーチャル（疑似体験的）なもの。フルートの演奏者が出てきて演奏をしても、単に教室では音の仕組みは違うらしい程度しか理解が進まないんですね。」

バーチャルと番組後の実践の組み合わせが、より効果の高い学習をもたらすという。

### 「集団の中でこそ個が生きる」 ことを表現したい

では、子供に音楽の楽しさを知らせるのに、どんな番組を作りたい？

「今、渋谷駅前で、見ず知らずの人が打楽器を持ち寄ってアンサンブルをするという不思議な現象があるのをご存知ですか？特に打楽器や管楽器などは、1人で演奏するのはさびしいもの。何かこう、心のふれあいを求めて同士が集まり、不完全なものでいいから1人1人出し合って、想像しなかったものを皆で作出すという思考に長けているのではないかと思います。こういった面白い世界を、コミュニケーションの手段としての音楽を表現したいです。双方向的なものができるかどうかわかりませんが。」

山上さんも、実は小さいころピアノを学んでいたお一人で、現在はトロンボーンを嗜んでいらっしゃる。

「ピアノって多分、ピアノだけで音楽が完結してしまうじゃないですか。不十分な方が人とつながりが出来て面白いんだよということも、子供に教えてほしいですね。」

学習指導要領でも「子ども1人1人を生かす」とか「自ら学ぶ」と

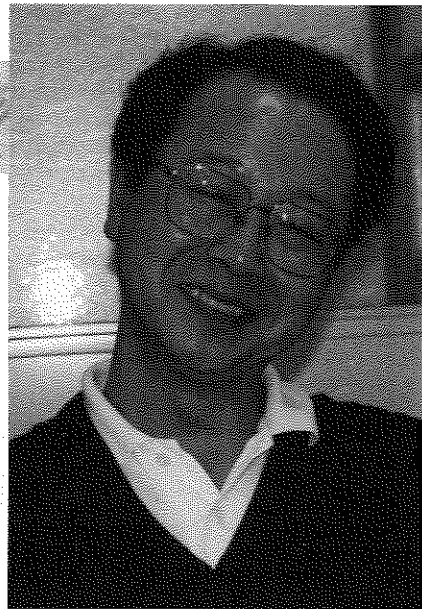
記されており、一瞬個別的な学習指導がイメージしてしまうのが、「音楽活動においては、むしろ、個と集団の関りにおいて、豊かな感性や創造性が育つという面がある」と山上さんは指摘する。集団の中でこそ個が生きるということを実現できる音楽。共感したり、互いの発想を認め合ったり、それぞれの感性の違いを知る中で、自分なりの表現や解釈が育まれていくのかもしれない。



現在放送中の『トゥトゥアンサンブル』（3、4年生）

最近の学校放送の動向として、学習指導要領から逸脱した新番組が誕生している。学校放送も今、新しい時代を迎えようとしている。

「学習指導要領を見ても、細かい規定がどんどんなくなってきています。授業の1つのアイデアを提供していく形で学校放送の役割を担っていきたいと思います。」



\*\*\* \*\*

## 「教育音楽専門誌」から見た 21世紀の音楽教育

清水 久嗣氏

(株)音楽之友社教育事業部「教育音楽」編集部編集長

しみずひさつ◎1950年(昭和25年)生まれ。慶應義塾大学文学部史学科卒。昭和49年、株式会社音楽之友社入社。「教育音楽」「音楽の友」の編集を経て、現在教育事業部「教育音楽」編集長を務める。

清水さんは、19年間『音楽の友』の編集を務められ、3年前より『教育音楽』の担当に異動、現在編集長を務めている。これまでクラシック音楽を中心に雑誌作りをしていた清水さんにとって、教育音楽の仕事は「世界の音楽」との再会だった。

「現在の学校の教育現場では、西洋音楽中心でもそれ一辺倒ではなく、世界の音楽にいかに関心があるか、という観点が多くなっているようです。」

ある意味で、学校で扱う音楽のジャンルが国際化していく中で、日本の伝統音楽、伝統楽器が授業で取り上げる働きかけが目立ってきている。三味線、尺八などを勉強する音楽教員も多く、今年の夏休み期間中は、特に伝統音楽をテーマにした講習会が盛んに開かれていたという。

### 伝統の継承と 幅広い価値観の育成

今後の学校教育のあり方について、「変わらなくてはいけない部分と変えていけない部分を分けるとしたら・・・」と清水氏は続け

た。「変えていけない部分とは、一つは、伝統音楽についての教育だと思います。西洋音楽にしる日本音楽にしる、何百年という時間の中で宗教を超え民族を超え愛好されてきた作品は、次世代に伝えたい音楽だったということです。歴史の中で守られたものは受け渡す責任があること、伝統を継ぐ考え方の基礎を作ることは、学校教育の役割といえると思います。ピアノ教育でいうなら、西洋のピアノ音楽に固執し、使命感をもってピアノ指導にあたられるピアノ指導者がいてもよいのではないのでしょうか。」

では、変わらなくてはいけない部分とは?

「多様な音楽文化を見て聴いて楽しんでもらう機会を作ることです。子供の価値観はある部分に集中しがち。好きな音楽だけを聴き、音楽の授業がなければ、狭い価値観だけで大人になってしまうでしょう。そこに住んでいる人間の数だけ音楽があり、多様な価値観が存在することを知り、そ

の上で最終的に、西洋音楽が好きだと自分が選択される方がよいですから。」

### 個々の表現意欲が活かす

小学校3年から教材楽器として親しまれてきたはずのリコーダー。しかし、毎年小学校の卒業式を迎えるころ、ダンボール箱いっぱいのリコーダーが捨てられていくという。子供たちは、リコーダーから何を得ていったのか・・・。「大切なのは、楽器を通してこう音楽表現したいという意欲を育てること。その点、30人が一斉に歌ったりリコーダーを吹いたりするのは、あまり音楽的な指導とはいえないですね。基本的な音楽知識も指導をしなくては行けないが、音楽を表現したい気持ちを育てていかなければ、大きな力にはならないでしょう。教材一つ取っても、自分はこんな音で表現してみたい、いろんな表現方法を試してみたいという気持ちがあっても、一斉指導の中ではなかなかそういった個々の表現意欲が活かせられないのではないのでしょうか。」と指摘する。果たして、ピ

アノレッスンでも、ピアノに向かっている子供たちは、常にピアノの音色で表現したいのだろうか・・・。

### 他教科との総合的な音楽学習

小学校では授業崩壊など新たな問題が起こる中、授業自体が楽しいと感じるものにしなければならぬ。そのためにどんな工夫をされているのか?

「子供が日常触れている音楽を取り上げるのも工夫その1つ。ロックやラップなどを教材として、音楽への理解関心を高める取り組みをされている先生が多いです。今の音楽教師は、教えることが非常に多岐にわたっているようです。」

多岐にわたっているといえ、2002年の新学習指導要領から誕生する「総合的な学習の時間」というカリキュラムがある。年100時間程度、小学校3年生から実施される予定で、実は準備が整い次第、すでに施行されているという。指導要領では、特に中身については指針がないが、この時間の一番の狙いは、「子供が自ら課題を見つけ、自ら解決していく力をつける」ことにあるという。

活動主体者である子供が、「これを体験してみたい」というものがあれば、しめたものだが、先生が青写真を作っておいて、成り立たせる手助けをしているのが現実のようだ。いままでの取材で、どんなアイデアがあったのか?

「一番多く言われているのが、子供ミュージカルで、背景の絵を描いたり、物語には複数の教科の要素を取り入れて作り、音楽として発表するようです。」

他にも、地域の伝統芸能を学ぶ、国際理解教育としてマザーグースを表現する、竹などの地域の特産物を育てて楽器を作る、地域の老

人施設で聴いてもらう。修学旅行でも、沖縄でも現地の伝統芸能を習ったり、震災の神戸で体験したものを聞いて詩や音楽にする等々。これらは、総合学習や音楽の授業で実際に行われた例で、このように学校教育の一教師だけでは不可能なことを、地域や家庭、教育行政が一体となって実施されている。ネットワークを広げ、地域の素材や人材の活用することによって、子ども自身が本物の文化に触れる、リアリティのある学習体験が実現しているのである。

「もはや学校教師は、アイデアマンでないとやっていけないですね。」

### 音楽との関り方の基本を学ぶ場

生涯学習の出発点である学校教育は、「学び方」の基本を身に付けるような教育が強く求められているという。つまり学校の音楽教育は、生涯にわたって音楽とかわり、音楽に楽しんでいくための基盤として、「様々な音、音楽との関り方の基本を学ぶ場」でなければならないわけだ。そのための一つのアプローチとして、「自ら音楽的な素材を探し出し、関っていく面白さを体験する」授業のアイデアに、最近興味を持っていると清水さんは言う。

「サウンドスケープという言葉が、最近良く聞かれるようになりましたが、これが音楽の授業の中で取り入れられています。自分たちの身の回りには音を聴いて、自分と音との関係を知る試みです。1分間の間耳を澄まして聞こえた音が自分のにとってどんな意味



上写真:「教育音楽」10号  
日本教育音楽協会の機関誌として、音楽之友社で編集・発行されている「教育音楽」という雑誌は、小学校編は54年前から、中・高校編は43年前(高校編は20年前から)から刊行している、音楽教師向けのメイン雑誌。

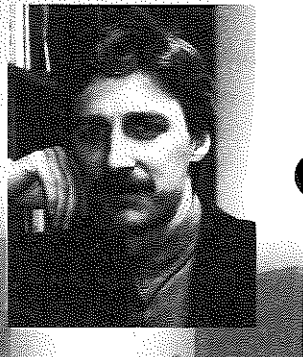
があるか。回りの音って、聴いているようで聴いていない、というか、自分の意識を向けた音しか聞こえていない。そして自分にとって必要な音が、別な人には必要がない音があるのに気付くのです。つまり、音と人間の関係は1つの価値観では言いきれず、人によってマイナスプラスの価値観があるのを知り認めることができるのです。その辺に、何か音楽を作ったり聴いたりしたときの命題があるような気がします。」

\*\*\*\*\*

# 音楽教育における 新しいプロフェッショナリズム

## —アメリカの大学及び音楽院において プロの音楽家の育成がどのように変わりつつあるか—

講師/ダグラス・デムスター  
(イーストマン音楽学校副校長)



現在、日本をはじめ、世界中の高等教育機関が直面している数々の問題に対し、新たな試みを実践しその成果をあげているアメリカの音楽大学の事例を紹介したいと思います。

第二次世界大戦後、アメリカの音楽学校は、オーケストラやレコード業界とともに急成長しました。当時の音楽家養成には、楽器の熟達、レパートリー、そして芸術性に重きをおく「古いプロフェッショナリズム」があり、20年前の有望な若い音楽家にとっては、これが成功への近道でした。

しかし現在、若いプロの音楽家たちが競争の激しいクラシック音楽及び商業音楽の世界に立ち向かう準備ができるように、米国屈指の音楽学校では、急速に科目や学位の種類、学外実習活動の指導を増やしています。この流れは「新しいプロフェッショナリズム」と呼ばれていますが、音楽大学関係者に限らず、初期教育に携わる指導者にも興味深い事例となるでしょう。

なお、この記事は、去る7月31日慶應義塾大学にて開催されたアート・マネジメント教育研究会特別セミナー「新しい音楽教育プログラムの展開」(主催：慶應義塾大学アートセンター・共催：Sony Music Foundation)の中から抜粋し、その概要をまとめたものです。

\*\*\*\*\*

他のビジネスと同様、音楽大学及び音楽院は、一部の評論家たちが「クラシック音楽は死にかけている」とまで

言った市場に反応せざるを得なかった。これはとんでもない誇張的表現である。私は少しも信じてはいない。音楽は最も根本的な人間の芸術形態である。そして芸術音楽は、たとえ「クラシック」音楽でないにしても、存続するだろう。

イーストマン音楽学校は、過去何年にもわたって、同校の数多くのカリキュラムを検証し、クラシック音楽及びジャズの変わりつつある文化や市場に対応して、プログラムの変更や拡充を計ってきた。私たちはこの変革のプロセスを「イーストマン・イニシアティブ」と呼んでいる。

イーストマン・イニシアティブは、表の四つのテーマが核となっている。

イーストマン・イニシアティブとは、音楽の文化と市場の進化にあわせて、見直しと改訂を何度も行うプロセスである。新しいプログラムの多くが本校の学生にこれまでとは違う範囲の技能、音楽家に求められる「新しいプロフェッショナリズム」を提供している。これからの話の中では、特に学生たちを新しいプロフェッショナリズムに向けて準備させるための新しいプログラムについて説明しようと思う。ただし、新しい分野のプロとしての技能に重きを置くことになるが、そうする中で、基本的な音楽家としての技量、技術的な素晴らしさ、あるいは演奏における芸術性の大切さを軽視するという意味ではない。

### 事例1 : MUSIC FOR ALL

イーストマンの卒業生の多くは、教師及び演奏家という将来の仕事の中で、ソリストとして、あるいは小編成のグループの中において、学齢期の子供たちのために、または老人ホームや地域社会の組織、教会、その他のグループのために、教育的な演奏をするべきであると感じている。こういう演奏は概して、コンサート・ホール以外のところで行われるものである。

『Music For All』とは、室内楽のカリキュラムと地域活動のワークショップや演奏会とを結合させたプログラムに、イーストマン音楽学校がつけた名前である。

この『Music For All』のプログラムでは、例えばハイドンの四重奏曲を演奏する技術的な面を習っている学生の室内楽グループが、ワークショップにも参加して、その四重奏曲を子供たちや地域社会の聴衆を対象に演奏する際、どのように演奏したら良いかについての指導を受ける。目標は、教育と楽しませることを同時に行うことにある。これらの「地域社会での演奏」を準備する段階で、グループはイン・カルテット(Ying Quartet)から演奏上の解釈と聴衆の参加という二つの事柄についての指導を受ける。このイン・カルテットはプロの若い四重奏団で、世界有数のコンサート・ホールでの「エリート」聴衆の前での芸術的に最高レベルの演奏と、聴

#### イーストマン・イニシアティブ

- 一、クラシック音楽の将来のための新しい聴衆に接触を計り、その数を増やし、彼等を教育するための新しい方法を学生に教えること。
- 二、学生が音楽分野での仕事について、起業家的な考えができるようにすること、中でも最も重要なのは、演奏家と聴衆が一緒になって素晴らしい音楽を創り出し、鑑賞することのできる新しい機会を作ることである。
- 三、学生や教授陣が新しい音楽やテクノロジーに前向きな関心を抱くよう奨励し、クラシック音楽とジャズのスタイルを進化させることによって、芸術音楽の未来を開かれたものにしておくことを目指している。
- 四、クラシック音楽とジャズの変化しつつある状況に呼応する中で、学生たちが芸術的また組織的なイニシアティブを取ることを奨励している。

きたいと望むあらゆる人々のための教育的プログラムとを、実に見事に結合させてきた。彼らはイーストマンの学生に、芸術的手腕と教えることとは同時に追求できるし、またすべきであるということを示してくれる素晴らしいお手本である。また、学生の室内楽グループは、イーストマンの教授陣のメンバーはもちろんのこと、ロバート・カプランやカナディアン・プラスなどのような立派な指導者のアーティストも加わって行われる、聴衆に対する表現の仕方についてのワークショップにも参加する。

Music for Allを通して、私たちは本校の学生にいくつかの大切な教訓を学んで欲しいと願っている。第一に、マスターし準備するのに何時間もかかるクラシック音楽の傑作と同じように、聴衆というのは変化に富み、複雑であるということを読んで欲しい。演奏の準備をするということは、自分のレパートリーを準備するのはもちろんであるが(「練習、練習、練習!」)同時に、ある特定の聴衆のために準備することも要求される。もう一つの重要な教訓は、クラシック音楽あるいはジャズの音楽家は、お客さんに聴いてほしいと思ったら、常に聴衆を教育することに自分のエネルギーを注ぎ込まなければならないということである。クラシック音楽とジャズは頭を使わない種類の音楽エンタテイメントではなく、十分に楽しんでもらうためには知的なエネルギーと集中力、研究が要求されるのである。クラシック音楽とジャズの音楽家は、その上で、与えられるあらゆる機会を利用して、聴衆を教育することに積極的に時間を費やさなければならない。

### 事例2 : アーツ・リーダーシップ プログラム(ALP)

1960年から1980年、米国がより高度な教育を目指していた「ブーム」の時代に、音楽大学と音楽院は、米国内の他の職業学校と同じように、卒業生たちが入っていくプロの世界から孤立してしまった。この時代のイーストマンの卒業生たちは、時々私にこんなことを言う。「なぜ誰も〇〇〇〇について教えてくれなかったのだろう」と。この空欄を埋めてみよう。「なぜ誰も、オーケストラ業界について、音楽家組合について、レコード業界について、フリー奏者として生き残っていくことについて、マーケティングについて、アート・マネジメントについて、政治や政府の政策が音楽や音楽家に与える影響について、などなど...教えてくれなかったのだろう」となる。もっともらしく言えば、完成されたプロとして通用するレベルの音楽家になるために必要な基礎的な音楽の技術を教えることだけで、私たち

のカリキュラムはいっぱいなのである。しかし、すでに申し上げたように、プロの世界で成功するために学生が知っておく必要のあることはもっとたくさんあるのだ。

アーツ・リーダーシップ・プログラム(ALP)は、本校の学生に、スタジオや練習室ではわからない職業的な問題に触れさせることを狙いとしている。このプログラムは学生たちが職業についての目標を形成するのに役立つよう、特にその目標がこれまでの伝統的な道をたどらない場合に手助けとなるように、考案されている。このプログラムはまた、彼らが学生という立場から、実際にプロとして仕事を始める段階へと移行できるよう、準備をさせるものでもある。最も重要なのは、アーツ・リーダーシップ・プログラムが、プロとしての演奏と教える機会を"創り出す"イニシアティブやリーダーシップの感覚を学生が身につけることである。私たちは彼らに、チャンスを追いかけるだけでなく、チャンスが生まれるように"働きかける"ことも教えている。このプログラムは、まもなくプロの世界に入っていくようとしている学部4年生と大学院生を対象としている。

アーツ・リーダーシップ・プログラムには三つの構成要素がある。カリキュラム、インターンシップ・プログラム、そして個人的な就職カウンセリングである。

**A: カリキュラム**

カリキュラムには、1)音楽と社会、および芸術団体の運営、2)演奏セミナー、3)キャリア開発、4)音楽テクノロジー、の4つの広範な分野におけるバラエティに富んだコースが含まれている。これらのコースが扱う仕事に関連する内容の幅広さをお分かりいただけると思う。

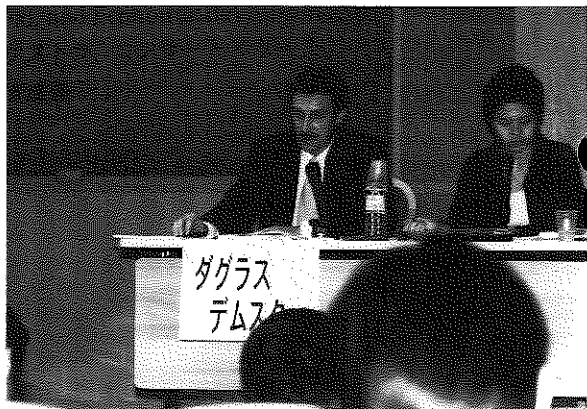
**B: インターンシップ・プログラム**

米国では、インターンシップによって、学生はその職業について学び、貴重な仕事の体験を得るために、プロとしての環境の中でボランティアをすることができる。これは米国ではビジネスやその他の組織で入門レベルの仕事に就く若者を選ぶ際の一般的な方法となりつつある。

このプログラムは、現在は4年生になろうとしている学生たちが取れる。インターンシップに参加を希望する学生には、私やインターンシップ・コーディネーターが、どのような種類のインターンシップが彼らにとって最もプラスになるかをアドバイスする。インターンシップの計画が立てられると、インターンシップ・コーディネーターは、その計画に相応しい適切な専門職組織に学生を配置する手伝いをする。

ほとんどのアメリカの都市や州には政府の、あるいは政府関連の芸術活動を支援する機関がある。イース

トマン音楽学校はこれらの機関に、政府の芸術政策に関心を持つインターンを送り込んできた。地元ロチェスターの病院と音楽療法の協力関係を築き、実践してきたインターン・グループもいれば、学内のオフィス、例えばレコーディング・スタジオ、広報部、コンサート・オフィスなどで仕事をしていたインターンもいる。ロチェスター管弦楽団の事務局でインターンとして務めてきた学生も多い。その他にも古楽演奏団体や、オペラ・カンパニー、学校、芸術評論家、そしてイーストマン音楽学校内外の様々な音楽関係団体で仕事をしてきた学生インターンもいる。



学生たちは、プロの音楽家が演奏のために舞台上がる度に、そこに至るまでの長くて複雑なプロセスがその音楽家をそこに来ている聴衆と結びつけたのだ、という事実を見落としがちである。つまり、契約、企画、プロモーション、コンサートの運営、資金調達などである。

これらのインターンシップをとおして学生たちは、公演の陰にある組織的な機構を学ぶことができるのである。そして、ほとんどの学生は演奏家あるいは教師となることを目指しているものの、彼らのほとんどがそのキャリアの中のある時点で組織や経営に関わりを持つことに気づくだろう。学生たちの中には、アーツ・リーダーシップ・プログラムのカリキュラムやインターンシップを通して自分たちには音楽ビジネスの他の職業に向けた本物の才能があることを発見し、そういう職業に進むことを選ぶものもいるのである。

このようなインターンシップに関わっている学生は、正規の従業員と同じように行動することが期待され、はインターンシップのスーパーバイザーとイーストマン音楽学校のインターンシップ・コーディネーターの双方によって評価される。若手の芸術家をプロとして育成することに専心している民間の財団の寛大なる厚意によって、学生インターンは参加に対して少額の報酬

を受け取る。

また、卒業後のインターンシップは、正社員採用へとつながることがよくある。このプログラムによって、イーストマンの卒業生は多数の主要オーケストラ、音楽学校、オペラ・カンパニー、アート・マネジメント会社、その他の優れたポジションにおけるアート・マネージメントの初歩的な職に就いているのである。

アーツ・リーダーシップ・プログラムは音楽家を芸術管理者に変えるために考案されたものではない。イーストマン音楽学校では、二つの重要な事実注意到注意を払っている。

第一に、本校の卒業生の多くが、最終的には仕事に対する報酬のほとんどは演奏から得ているわけではないということである。大勢の卒業生たちが、学校やフェスティバルやコンサート・ホールで、演奏家や教師としての仕事をつなぎ合わせてこなしている。もし私たちが学生を"使い道の多い人材"に育てれば、音楽ビジネスにおける彼らの将来はより成功し、より充実したものになるだろう。プロとしてのマネージメントの技能を持っていることは、音楽家にとって貴重な才能の一つなのである。

第二に重要な事実、芸術におけるリーダーシップとは、数多くの様々な職業についている数多くの様々な人々から生まれるということである。音楽の世界を率いているのは、レナード・バーンスタイン、ピエール・ブレーズ、小澤征爾だけではないのだ。芸術におけるリーダーシップは、教師やレコード・プロデューサー、オーケストラ・マネージャーや広報担当者、音楽評論家やサウンド・エンジニアからも生まれるのである。私たちは、学生にこれらたくさんの多彩な分野で彼らが影響を及ぼすことのできるあらゆる方法を考えることを奨励している。

**C: 個別の就職アドバイス**

アーツ・リーダーシップ・プログラムの学生は、最終学年になると、自分の職業の目標についてアドバイザーや特別客員の方々と話し合うことになっている。コースの最初から、私たちは学生たちがどのような職業目標が自分の希望にかなうものであるか、学生としての興味や才能についてよく考えるための手助けをしているが、このプロセスは、学校を訪れるプロの方々(その多くがイーストマンの卒業生である)を卒業を間近に控えている学生に紹介することによって、非常に助けられている。そうして彼らは、目標となりうる音楽家に会うことになり、自分たちの職業の可能性について非常に狭い範囲でしか理解していない学生たちは、この出会いによって多数の可能性を広げられるのである。

**事例3: 学生が運営するアンサンブル**

この2年間にイーストマン音楽学校に出現した最も素晴らしいイニシアティブは、学生が運営するアンサンブルである。

ニュー・イーストマン・シンフォニーもその一つで、大学院生の音楽家によるマネージメント・コア・グループが運営している学生オーケストラである。この中心グループは、教授陣のアドバイザーと相談しながら、このオーケストラのコンサート・シーズン用の全レパートリーを選ぶ。彼らはオーケストラの席順についての決定も下し、オーケストラのメンバーの教育も含め、あらゆる人事に関する問題も処理する。また、地域活動の公演の手配や、自分たちのコンサートに関するパブリシティも彼らが担当する。運営の中心グループの仕事は、プロのオーケストラの運営と同じ方法で分担されている。オーケストラのアドバイザーとして、私はコア・グループと定期的集まり、彼らが直面している運営上の問題について論議し、また彼らの経験していることにいかに類似しているかということと話している。彼らはイーストマン・フィルハーモニアのような規模もなく、リハーサルも充分に行っている学内の他のオーケストラと同じレベルでいつも演奏をしているわけではないが、自分たちが所有しているということや責任感から生まれるこのグループの傾倒の度合いや熱心さにはめざましいものがある。1998年、このオーケストラによるメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」のコンサートでの演奏が、米国最大のクラシック音楽のラジオ局、WQXRで放送された。彼らは同じ曲を翌週、子供のためのコンサートで演奏した。学生が率いるこのオーケストラのコーディネーターで、博士号課程でクラリネットを学ぶ学生は、先頃、アメリカ・オーケストラ連盟の権威あるマネージメント・インターンシップを授与された。これは通常、オーケストラでのビジネスで数年間の経験を有するプロのマネージャーに贈られる賞である。ニュー・イーストマン・シンフォニーが芸術的な成功であるだけでなく、学生のイニシアティブ及びリーダーシップにおける試みとして、大変重要なのである。

このように学生が運営するグループは、学生たちが機会を与えられると、いかに素晴らしいことをやりこなせるのかを証明してくれた。イーストマン音楽学校ではこのようなプロセスをとおして、学生たちが将来プロの世界に入った際に、聴衆を増やし、クラシック音楽の世界の新たな面を開く起業家としての技能を

発達できるような環境を与えているのである。

事例4：学生のイニシアティブ

教師や管理者たちは学生たちの独学の才能を見落とすにはいけない。イーストマン音楽学校では、学生にリーダーシップを取る機会を与えてきたし、彼らはきわめて素晴らしい方法で学校そのものとプログラムを変容させてきた。このように学生にリーダーシップをとらせる試みは重要性が低いとは言えない。私たちが学生にイニシアティブやリーダーシップの取り方を教えることは必須である。

このことはとても大事な問題を提起する。私たちは音楽の将来は、これまでも常にそうだったように、予見できない、驚くような形で変化していくだろう。作曲法も演奏の練習も発展を続けていくだろう。音楽学校で、将来を見据えた教育が的確に施されているのかどうか、私には確信はもてない。プロの音楽の世界は競争が激しいために、米国における伝統的な音楽の学士号のプログラムはとても要求が厳しいのである。米国で音楽学士号を取得するためには、学生は非常に多くの必修コースを取らなければならない。レッスンはもちろんのこと、各学期ごとに大規模なアンサンブル、室内楽演奏、3年以上の音楽理論、2年以上の音楽史、3年以上の聴音訓練、鍵盤楽器の技能、そしてレパートリー、教授法、第二選択楽器、その他のさまざまな条件がある。米国では音楽学士の学位は通常、人文科学、科学、あるいは外国語を少なくとも4年間勉強することも要求されているのである。

結局、私たちは学生たちの教育の中で、彼らがイニシアティブを実践するような機会も選択もほとんどないようなカリキュラムをやってきたのだ。私たちは彼らが指導に従うよう教えてはいるが、自分たちの行く先を見つけるような訓練はしてこなかった。第二に、私たちは、全員がまったく同じ音楽技能を、そしてお揃いの狭い範囲の職業的目標を持っている学生ばかりを卒業させるという危険を冒しているのである。これでは、急速に変わりつつあるプロの世界に備えて学生を育成するような教育ではない。このことに気づき、イーストマン音楽学校の教授陣は、より個別化された方法で学生を教育することに専心している。私たちの目標は、学生たちにイニシアティブを取ることを、先のことを考えること、自分自身の才能や興味をもとにことを進める方法を学ぶことなどを教えることである。

これを実践するために、私たちは新しい学位プログラムをつくった。音楽芸術学士号(BMA)である。この

学士号プログラムは、従来の音楽学士号(BM)の学生に求められるのと同様の高い演奏水準を維持することになるが、3年目及び4年目の研究についてこれまで以上に自分たちで決められるようになっていく。学生たちは、音楽史、音楽理論、人文科学の中からより多くの選択科目が取れるようになる。彼らはアーツ・リーダーシップのカリキュラムから音楽と社会についてのコースを取ることが義務づけられる。彼らは教授陣と相談しながら、個別化された研究分野を計画し、これには最終学年のプロジェクトが含まれる。このプロジェクトはリサーチでも演奏プロジェクトでも構わないが、目標は学生たちがありきたりでない演奏及び指導の機会を探究することにある。

BMAの誕生によって、学生たちは2つの学位コースから選択ができることになる。BMは、かなりきつりと規定された、伝統的な音楽の技能に重点を置く。この学位はオーケストラの団員、学校の音楽教師、フリーの音楽家、大学教師などをを目指す学生向けに作られている。一方、我々古い世代には学生たち自身よりもっとぼんやりとしかわからないかもしれない、ありきたりでない起業家的な将来の職業に対する準備をするための最大の機会を与えるのが、BMAである。

※この他、「地域社会のパートナーシップ」「テクノロジー」について事例紹介がありましたが、本誌は紙面の都合上割愛させていただきました。



むすび

二つのファクターがアメリカの音楽学校における劇的な変化を後押ししています。ひとつは、プロの音楽の世界が今や非常に競争が激しく、また複雑なものになっているために、「練習、練習、練習リが才能ある若者を世界のコンサートの槍舞台へと送り込むとはもはや保証されていないということです。成功するプロの音楽家に必要なのは、優れた教育に加えて、良いコネクション、幸運、思い切り融通がきいて、楽観的で、機略縦横で、多才であることなのです。二番目の理由は、芸術音楽の将来は我々の学生たちの手に委ねられているということ、現代の音楽学校を運営する教師や管理者のほとんどが理解していることです。芸術音楽の輝かしい将来を確実なものにするためには、我々の卒業生たちが立派な芸術家だけでなく、賢い起業家、思想を表現できる主張者、洞察力のある管理者、的確な教師でもなければなりません。この新しい世代のプロの音楽家たちを養成することは、我々の音楽学校の責任なのです。(以上)

学習指導要領改訂により、新しく加わった表現、変更されたキーワードを、多数の改訂事項の中から3点選んでみました。その理由を探ると、21世紀の教育方針が見えてくるようです。ピアノレッスンにも、取り入れてみてはいかがでしょうか？

1 リズム遊び・ふし遊び・音遊び (低学年/表現)

低学年で、簡単なリズムをつくる活動を展開するとき、特に児童の感覚面を重視し、リズムの面から楽しく表現できるリズム遊びやふし遊びなどの活動を工夫して行きます。遊びの中で様々なリズムのおもしろさに気づき、それらを模倣したり、自ら簡単なリズムをつくって表現したりします。具体的な活動としては、体(手、足、ひざ、肩など)や楽器を使ってのリズム模倣、リズム問答、打楽器による簡単なリズム伴奏などがあります。また、体を用いたリズム表現(じゃんけん遊び、けんば遊び、手遊びなど)や言葉遊び(人や物の名前遊び、絵かき遊びなど)、声や身近な旋律楽器によるふし遊びなど、児童が体全体で生き生きと楽しくかかわることのできる活動が考えられます。

また、音遊びとは、自然の音、身の回りの音、動物の鳴き声や人の声など、児童がこれまで何気なく聞いていた様々な音の響きに注目し、音そのもののおもしろさに気付いたり、音の響きに含まれる気持ちや情景を想像したりする活動です。また、声や身の回りのものを楽器にして、いろいろな音の響きを模倣したり、一つの楽器や音の素材から工夫して何種類もの音を見つけたりする活動など、児童が遊びの感覚で自ら思いのままに音とかかわることを指しています。表現する方法としては、声や楽器、擬声語や擬態語、身の回りの様々な音の素材(木、金属、竹、紙、息など)、手作り楽器などを使ったり、奏法を工夫したり

することが考えられます。また、歌詞の表す情景や気持ちなどを音で表現し、それらを歌唱や器楽の活動の中に生かしたりすることなども考えられます。

この活動を展開する際、児童が具体的にイメージしやすい活動を工夫すると同時に、児童が探したり、見つけたりした音に音楽的なかわり(強弱、速度、沈黙など)をもたせるようにします。そこから、自分の思いを込めた音の一つ一つを大切に表現する気持ち、あるいは、友達の表現したものを聴いてその意図をくみ取り、耳を澄ましてじっくり聴こうとする姿勢を育てていくことも大切なことです。

2 そのよさや楽しさを感じ取る (低学年/鑑賞)

鑑賞の指導では、児童が様々な音楽と出会い、一人一人が自分なりの子どもらしい音楽のとらえ方や考え方を大切に活動を進める中で、進んで音楽を聴こうとする意欲や態度を身に付けるとともに、楽曲の特徴に気付いたりそのよさや楽しさを感じ取ったりする能力を伸ばすことがねらいとなります。さらに、友達といっしょに音楽を聴く喜びを感じたり音楽を聴いて感動する体験を共有したりするなど、音楽鑑賞という行為そのものの楽しさを積み重ねていくこともとても大切です。

低学年の児童は音楽を聴くと自然に体が動いたり旋律を口ずさんだりすることが多く、感覚的に音楽をとらえる傾向があります。したがって情景を思い浮かべやすい

楽曲、身体反応の快さを感じ取りやすい楽曲、さらに楽曲の気分が明快で感じ取りやすいものなどを教材として選択するようにします。そして、耳で聴くだけでなく、身体反応などを通して、体全体で楽曲を特徴付けているリズムや旋律、楽器の音色の特徴、音楽のよさや楽しさを十分に感じ取れるような指導を工夫することが必要です。

3 表現形態を選んで学習できるよう (高学年/表現)

子どもの側に立った教育を進めるといふ新しい教育観に基づいたものであるということです。この教育観のもとでは、児童が主体的に学習することが求められています。教師は、児童が主体的に学習ができるように支援することが重要な役割になります。学習の主体者は児童であることを明らかにし、教師と児童の関係に新しい視点を取り入れたとも言えます。したがって、この活動では、表現形態を教師が選択するものではありません。あくまでも、児童が選択できるように教師は様々な準備を行い、児童の音楽活動の支援ができるようにする必要があります。そのために教師は、綿密な指導計画を立案するとともに、児童一人一人が確実に基礎・基本の力を身に付けられるようにすることが大切です。

なお、この解説は、小原光一編著「小学校音楽科新学習指導要領ガイドブック」(教育芸術社)より抽出しています。

新・学習指導要領に見る21世紀へのキーワード